

渡辺澄夫先生を偲ぶ

外山幹夫

「オーイ。そこを歩いて来るのは外山君じゃないかねー。」

これが渡辺先生が私に声をかけられた最初の出合いであった。時は昭和二十九年七月中旬、大学の夏休みが始まったばかりのことである。翌年春の卒業論文作成に向け、大分に初めて出かけた時のことである。

実は卒業論文作成について、私は中世史の河合正治先生(当時広島大学文学部助教授)の研究室に御相談に伺った。先生は即刻、大友氏の研究をするように勧められた。そして、田北学氏編の幾つかの大友氏関係史料を紹介された。しかし、それは未刊の空白の時代があった。私は思い切って田北氏に、未刊のものをお持ちであれば拝見させて頂きたい旨の手紙を書いた。ところが思いがけぬ幸運なことに、自宅にあるので見たければ応じるとの御返事に接した。河合先生はこれを聞き、早速大学同期の渡辺先生に紹介状を出して下さった。かくて当時、大分市駄原にあった大分大学の学生寮の空室の一つを渡辺先生から御世話頂き、現地に赴いた。先生は初夏の日の午後、扇子で身体をバタバタ扇ぎながら私が現れるのをまっぴいて下さったのである。こうして、以後二十余年に及ぶ私の大友氏の研究が始まった。

その後も時折御会いする機会があり、種々ご指導に与った。或る時、「俺は古文書はちつとも怖くないよ」ともいわれた。多くの生の古文書に接しておられたことからくる自信に満ちた御発言で、思わずハツとした。

渡辺先生との最初の出合いから四十余年。当時の先生よりも齢を重ねた昨今であるが、あの時の先生の御姿が今も私の脳裏に焼きついて離れない。田北、河合両先生に続き、渡辺先生も亡くなられてしまった。今はひたすら御冥福を祈るばかりである。